名勝無鄰庵庭園にみる恒常維持管理の実態と一般性

The general observation of Intention and an Actual Situation of an Everyday Garden Maintenance
In case of Murinan Garden

○今江秀史¹ 阪上富男² 加藤友規²

Hidefumi Imae¹ Tomio Sakaue² Tomoki Katou²

京都市文化財保護課、大阪大学大学院人間科学研究科¹ 植彌加藤造園株式会社²

Kyoto City Cultural Properties protection Section ; Graduate School of Human Sciences, Osaka University¹

Ueya Kato Zoen Co.Ltd²

Key Words : (邦文) 1. 名勝無鄰庵庭園 2. 恒常維持管理 3. 一般性

1. Murinan Garden 2. Everyday a Garden Maintenance 3. General observation

摘要

本論の目的は、筆者らが実際に個別の庭の恒常維持管理に従事した記録にもとづく、恒常維持管理の一般性の解明である。

研究の手法は、国の指定名勝・無鄰庵庭園の歴史と恒常維持管理の体制の変遷について概説したうえで、筆者らが委託者と受託者の一員として実務に携わった6箇年にわたる恒常維持管理の公式資料にもとづいて、委託者と受託候補者との関係性を記述する。次に双方の立場について、それぞれの置かれた実情にもとづいて概説する。

その結果、恒常維持管理とは、自然的側面に支持された社会・文化的側面の条件のもと、来訪者の迎接などを念頭に置きつつ、委託者と受託者の相互触発の中で具現化される行為であることを明らかにした。

Abstract

The purpose of this paper is to present some general observation about everyday a garden maintenance based on practice used in an individual garden (Muranan garden) by this paper's authors.

First, we outline the history of Murinan garden and of its maintenance. We describe the relationships amongst the garden owner, the garden artisan, and the garden itself based on information recorded in official documents from Kyoto city detailing the gardens' maintenance over a period of 6 years. We, Then describe the differing perspectives of garden owners and garden artisans on many aspects of gardens.

Lastly, we are led to a certain perspective on the dependence of every garden maintenance is based on the social and cultural order which is itself based on the natural order; it is set of a behaviors to be realized by the relationship between a garden owner and a garden artisan in an individual garden in consideration of the visitors' satisfaction.

序文 恒常維持管理の記述手法の未確立

従来、庭の保存管理を対象とした論考は希少であり、とくに恒常維持管理の実態については、実質的に研究の俎上に挙げられてこなかった。

庭の保存管理の実態については、以下の先行研究がある。京都造形芸術大学日本庭園研究センターは、『庭園学講座Ⅳ 庭園の管理と病害虫』⁽¹⁾と『庭園学講座Ⅹ 文化財庭園の保存管理技術』⁽²⁾で、庭の保存管理の概論を取りまとめている。今江秀史は、「植栽樹木を主体とする維持管理における言語活動に関する研究」⁽³⁾と「『御所透かし』・『寺透かし』・『町家透かし』」⁽⁴⁾という呼称に関する基礎的考察において、言語を通じて庭の維持管理を考察している。中島宏は、「小石川後樂園と浜離宮恩賜庭園の植栽管理のあり方に関する研究」⁽⁵⁾において、文化財庭園の植栽管理の実態について検証し、文化財庭園の植栽の復元について論述している。

これら実際の庭を念頭においた研究は、一見保存管理の実態を確実に反映しているようにみえる。庭の保存管理は、人目につかないよう行われる裏方仕事である。その実状は一般社会に知られにくいとため、数少ない論考の信憑性はおのずと高くなる。ところが、従来の研究態度は、庭やそれを取り巻く人々を俯瞰かつ客体視してきたため、保存管理にかんする記述は、庭内の樹木にかかわる管理の範囲にとどまっており、恒常維持管理にかかわる当事者たちの動機や意図の把握は行われてこなかった。

恒常維持管理とは、つねに具体的な目的をもっている行為である。その体制は、庭の広さや所有者の経済背景など条件によってまちまちだが、庭の所有者が自ら行わないかぎり、委託者(所有者)と受託者(庭師)の二者が中軸となって実施される。このような対人関係は、庭の個別性に左右されることのない、恒常維持管理における前提事項の一端である。従来の研究態度では、その前提から目をそむけて庭の物質的側面だけが抽出されてきた結果、恒常維持管理の目的や文化的背景への関心が欠落してきた。恒常維持管理の実態が研究の俎上に挙げられてこなかったのは、その証左にほかならない。

庭がその形態を保つためには、恒常維持管理が不可欠である。その実態の一般性が把握できていないということは、ひとつの学として致命的な不備を抱えていることを意味する。遅きに失したとはいえ、これから恒常維持

管理の実態研究を始めるにあたっては、範例となる記録も論考もない白紙の状態、その行為の記録から着手する必要がある。本論は、恒常維持管理の実態研究の足がかりとして、個別の庭における委託者と受託者の記録を端緒に、その行為の一般性の解明に努めようとするものである。

1 研究の目的と方法

前例がみとめられない中で始められるこの実態研究は、あらたな手法の案出を余儀なくされている。

恒常維持管理とは、毎年くり返して行われる行為であるため、その研究の題材は、複数年間にわたる実践の記録であることが求められる。しかし、そのような雑然とした情報では、学術研究としての客観性に欠けるといった批判に晒されることになる。委託者と受託者の実践の体験にもとづいた記録などというのは、個々の主観でしかなく信頼に値しない。庭園学は、庭を対象とすべきであり、あやふやな人間の心理などを取り扱うことはできない。しかし、このような主観性・客観性の二元論に固執する限り、恒常維持管理の実態研究はいつまで経っても開始の糸口を見つけない。

恒常維持管理は、個々人による実際の行為である。その内実は、複数個人の心理と振る舞いが庭へ反映され集積されたものである。たとえば第三者が恒常維持管理の実践者の行動を観察した記録には、客観性があるといっても、実践者に内容を照合しない限りその妥当性は証明できないし、そもそも実践者を客体視したその行動の記録と、実践者の心理と振る舞いを念頭においた特定の場所における具体的な目的に即した行為の記録とは、同一ではない。実際の恒常維持管理において複数個人の意志が働いているからには、実践者が直接記述するか第三者が実践者にその内実を聞き取らないかぎり、実証的な情報を得ることは不可能であり、記述者の別を問わず実践者の実体験に依拠することが絶対条件となる。

先述のように恒常維持管理の体制は、委託者と受託者との二者が中軸となっている。その行為は、主観的であり客観的でもあるため、もとより主客の二元論は成立し得ないし、実践者たちの主観性を除外すれば、研究において有用な情報のほとんど全てが抜け落ちることになる。つまり、本来実態研究において避けられなければならない

いのは、主観ではなく、私見や先入観、論理の飛躍のほうであった。その点については、十分に配慮される必要があり、実践者の恣意的な体験の記述を避けるためには、論述の透明性からしても、研究の題材は、法律や規約などの公的な制度にのっとり、一個人ではなく組織もしくは共同体を対象とすることが求められる。さしあたっては、恒常維持管理の体制の一般性を尊重して、委託者と受託者の双方の実践内容を記述し、報告書をふくむ公式資料にとりまとめることが研究の土台となる。

本論では、筆者らが委託者と受託者の一員として実務に携わった、国の指定名勝・無鄰庵庭園（以下、無鄰庵とする）における恒常維持管理の取り組みを主題とする。無鄰庵（京都府京都市）は、地方公共団体・京都市が所管し、恒常維持管理が行われ続けている。平成20年度から平成25年度（2008.4-2014.3）にかけては、その業務委託の業者選定において、〈技術提案書〉^⑥が用いられた。表1～4は、6箇年にわたる同書における設問の一覧であり、その内容は委託業務にかかり筆頭執筆者自身が記述したものである。この無鄰庵の恒常維持管理にかかる公式資料である技術提案書の設問にもとづいて、委託者と受託候補者との関係性を解明する。技術提案書とその他資料から読み取ることができない補足的事項については、〔 〕内に表記した。設問における庭内各所の呼称は、〈形態概念図〉^⑦において統一が図られている（図1）。つづいて、委託者側（筆頭著者）と実際に業務を

受託した業者の一つ（受託者側／連名著者）との双方の立場から、恒常維持管理の実現に向かう心や意識と希求の達成状況の両面について概説する。その上で、恒常維持管理の実態と委託者側と受託者側双方の志向といった、個別事項の記述を糸口とし、その実務的な行為を貫いている一般性を明らかにしたい。

2 無鄰庵の歴史と恒常維持管理の変遷

庭の恒常維持管理は、社会要請にもとづく歴史の積み重ねを前提としている。たとえ委託者（施主）と受託者（庭師）が代ろうと、戦乱や経済的困窮による中断があろうと、庭が消滅しないかぎり恒常維持管理は継続される。長い時間をへた庭ほど、その歴史の厚みが所有者ならびに来訪者の関心事となる。それが国の指定名勝ともなればなおさら、管理体制については、庭の変遷をふくんだ歴史を尊重し、今日の実践内容と整合性をもたせる努力が求められる。それらは、無鄰庵の恒常維持管理における業者選定の取り組みについても例外ではない。恒常維持管理の具体的事項に言及する事前準備として、まずは無鄰庵の歴史とその体制の変遷について概説する。

（1）無鄰庵の歴史

無鄰庵は、明治の元勳・山県有朋（1838-1922）の別荘の庭として明治27年（1894）から同29年にかけて築造された。庭作りは、久原庄三郎の協力のもと7代目小川治兵衛が担った^⑧。昭和16年（1941）に、無鄰庵は京都市に寄

図1 無鄰庵の形態概念図

贈され、それ以降同市が所管している。昭和26年には国の名勝に指定された。

山県は、無鄰庵の施主としてその印象を、庭園内の石碑の碑文「恩賜稚松の記」や『続江湖快心録』⁹における黒田天外との談話の中に書き残している。以下、山県有朋の無鄰庵に関する考え方について、庭の分節ごとに列記する。文中の丸数字と小文字アルファベットは、図1の表記と対応している。

1) 無鄰庵全体

「マツと草川の流れのある自然の風致に富んだ、趣のある場所だった。名も知らぬ草の花が咲くのも趣がある。」…「恩賜稚松の記」

「他にスギやカエデ、ハザクラを植え、マツはあまり植えなかった。」…『続江湖快心録』

2) ④流れ

a (建物周辺) : 「洋館は倉庫がないので造ったがやや不釣り合いなので、植栽で遮蔽するつもりである。」

e (芝地周辺)、g (カエデ周辺) : 「明治天皇より御所の稚松2株の下賜があったので、庭に植えた。」…「恩賜稚松の記」

h (滝口周辺) : 「滝の近辺にはシダを植え、またモミも30本ほど植えた。」…『続江湖快心録』

3) ⑥外縁 (北西部)

「清流を渡れば、左方はモミの木二三十本流れを挟み林をなし、前には大仏の石垣かとも思われる面白き巨石は屹然としてそばだつ。左方の小路を廻り、杉樹の蔭を過ぎて巨石の裏手に出れば、ここは鬼芝を細かく刈込たるやや平坦の小丘にして、左方はスギとした。」…『続江湖快心録』

4) まとめ

庭内のスギ・カエデ・マツ・モミ・スギ・ハザクラは、明確な意図をもって植えられてものとみられる。但し、一部のマツは明治天皇より下賜されたと伝えられる、<⑤-g (池／カエデ周辺)>に位置する御所の稚松2株以外は、さほど植えられなかったと考えられる。なお、ハザクラは現存しない。洋館の周辺は、その遮蔽するために植栽が施されたという。<⑥-a (外縁／建物周辺)>の樹木は、モミであったと考えられる。滝の近辺のシダは意図的に植えられたものとみられる。『続江湖快心録』において、山県が黒田天外を案内した状況を見ると、かつて、山県が黒田天外を案内した状況を見ると、かつて

④-e (流れ／芝地周辺) >から<⑤-e (池／芝地周辺) >を経て、<⑤-h (池／滝) >に至る動線が機能していたことがうかがい知れる。

(2) 恒常維持管理の体制の変遷

無鄰庵の恒常維持管理は、京都市の所管になってしばらくの間、一定の業者に委託されていた。¹⁰ その後、指名競争入札に移行し、受託業者は毎年変更することとなった。

平成14年度の保存管理の在り方については、当時の公園行政の担当者による記録が残っている。¹¹ それによると、平成13年度まで、⑥外縁の植栽376本のうち恒常的に手入れが行われていたのは85本であり、残りの樹木を含めて全ての手入れを終えるのに8年を要すると目算されていた。その時点では、東山の借景を多少犠牲にしても、周辺の建物や工作物を遮蔽することが優先するという考え方にあった。そのため、園内における重要な展望地点は主屋2階の南部屋と茶室の東縁に限定され、それらの眺望に建物や工作物が入らないことが求められた。この時、樹冠の一部にできた空隙については、採光・通風を促すことができたとして一定の評価がなされながら、中期計画をもって塞ぐことが考えられていた。低木については、サツキの切り戻しをしながら樹高を下げることで、<⑤-e (池／芝地周辺) >に位置する巨石の周辺などの植栽を切り下げることが求められていた。

平成19年度からは公園担当課から無鄰庵の所管課による直接執行へ転換し、翌年度より技術提案書を用いる委託業者選定を行うことになった。¹²

3 技術提案書の設問の解説

本節では、6年間にわたり実施された業者選定の取り組みにおける技術提案書の設問を解説する。技術提案書の設問は、実施の内容の傾向からみて3期に大分される。以下、取り組みの大きな流れと顕著な出来事を中心に概要をとりまとめる。

(1) 1期 制度運用の模索

平成20～21年度の時点で委託者は、主として庭の各所における作業の考え方と投入される作業員の人数(人工数)に注視している。作業内容は、委託者においてあらかじめ「植栽管理」と「その他管理」が想定され、前者では7箇所に分節された庭ごとの、後者では各庭にて必要とされる

13 項目の作業についての回答を求めている。年間工程表では、各庭で費やされる作業日数の記述を求め、それぞれ8種の植栽の種類が併記されている。〔表1では省略されているが、第2号様式では、アオギリ・アラカシ・クロマツといった各庭に植わっている「具体的な樹種」にたいする、単植・列植といった「配植状況」、葉むしり・挟すかし・鋸すかしといった「具体的な手入れの方法」の選択が求められている。〕

〔技術提案書における人工数にたいする問いは、限られた予算内での作業における人員配分への関心の現れであり、作業項目と植栽の種類についての記述が詳細にわたっているのは、委託者側に専門の技術職員が所属していることから、恒常維持管理の内容を具体的に分析できる用意があるという内部事情を表している。委託者側としては、受託候補者にたいして最大限の費用対効果を求め、技術提案と作業内容の相互を確認する準備があるという意志がうかがい知れる。〕その一方で所有者の関心は、すべて個別事項のほうに向いており庭全体にたいする考え方が示されていない、

平成20～21年度の時点では、技術提案書を用いた業者選定の制度運用は手探り状態で行われており、委託者は恒常維持管理に関する具体的な方針を提示できておらず、受託候補者の業務にたいする基本姿勢を探ることが主目的となっている。技術提案書の設問に、恒常維持管理に関する細かい事項が記載されているのは、受託候補者が誠実かつ細やかな対応をできるか推しはかっているものとみることができる。つまり、この時期の技術提案書に込められた業者選定の評価の意図は、費用対効果の高さと受託候補者の誠実かつ細やかな対応ということになる。

(2) 2期 技術提案書の内容の不備に対する対応

〔受託候補者は、平成22年度より技術提案書の提出に加えて現地での説明が科せられることになった。それは、従来の書面だけによる審査では、作業の具体性を問うことができなかったことの反省によるものであった。〕同年度以降の技術提案書では、設問に対する回答を文章と写真とを併せて提示することが求められている(表2)。設問の内容は、費用対効果の高さと各庭における作業の具体性が引き続き重視されながら、庭の各所で実施される作業をどのように行うか、従来の実施例を通して提案するよう要求している。これは、技術提案の内容にたい

する実現の可能性を問うとともに、提案された人工数と作業実態との符合を確認しようとしている。

従来の技術提案書では、人工数の提示が求められながら、人工構成については問われていなかった。作業にあたる人員は、通常経験や立場によって区別されなければならないはずが、その点についての考慮が完全に欠落していた。〔そこで、表3では省略されているが第1号様式の人工を記入する欄には、A・B・Cの項目が立てられ、「過去に文化財庭園(無隣庵庭園を含む)の維持管理に携わった経験があり、庭園業者に10年以上継続して勤務した者が従事する場合は、Aに人工数を記入して下さい。Aに該当しない庭園業者に勤務する者が従事する場合は、Bに人工数を記入して下さい。庭園業を専業としない嘱託職員などが従事する場合は、Cに人工数を記

表1 技術提案書 設問等(平成20～21年度)

平成20年度実施(2008-2009)	
第1号様式 方針	
項目	各所での作業方針:庭園全体及び周辺環境等, ①表門及び玄関, ②露地(茶室), ③建物周辺及び中庭, ④流れ, ⑤園池, ⑥外縁, ⑦管理・作業スペース
第2号様式 人工数一覧表No.1,2	
項目	1. 植栽管理 各所で必要とされる人工数:①表門及び玄関, ②露地(茶室)③建物周辺及び中庭, ④流れ, ⑤園池, ⑥外縁, ⑦管理・作業スペース 2. その他管理 各所で必要とされる人工数:除草, 林内清掃, 芝生の施肥・エアレーション, 清掃, 池泉の浚渫・藻の除去, 不要な根の整理, 薬剤散布, 豆砂利補充・調整, 木柵修理, 木柵ロープ張替, 灌水, 樹木の生育状況確認
第3号様式 年間工程表	
項目	各所における作業に費やされる日数:①常緑中高木, 落葉中高木, 低木・地被, ②アカマツ, 常緑中高木, 落葉中高木, 低木・地被, ③常緑中高木, シロウチク, ④常緑中高木, 落葉中高木, サツキ・クサボケ, 芝生, ⑤アカマツ, 常緑中高木, 落葉中高木, サツキ・クサボケ, 芝生, ⑥常緑中高木, 落葉中高木, 低木・地被, ⑦植栽管理, その他 除草, 薬剤散布, 灌水
第4号様式 実施及び緊急対応の体制	
項目	1. 実施体制 2. 緊急時の連絡体制
平成21年度実施(2009-2010)	
第1号様式 調書	
項目	平成19年度以降変化が見える事項・今後手入れにおいて配慮することが望ましい項目・各所で必要とされる人工数:庭園全体及び周辺環境等, ①表門及び玄関, ②露地(茶室), ③建物周辺及び中庭, ④流れ, ⑤園池, ⑥外縁, ⑦管理・作業スペース
第2, 3号様式 年間工程表	
(前年19年度のものを流用)	

入して下さい」という注意事項が追記されることになった。それに加えて、「記述に当たっては、庭園業に携わらない人にも伝わりやすい表現を心がけて下さい」という事項が付記された。これは、〔業者選定の審査を行うのは庭の保存管理に専門知識をもつ設問の作成者をのぞいた管理職であり、かれらの大半が庭園の実務に精通していないため〕恒常維持管理の課題には、専門性に加え実証性や分かりやすさが求められたからである。

平成22～23年度の技術提案書の設問では、以前に求められていた受託候補者の誠実かつ細やかな対応は一定評価できるとみなされ、現地における受託候補者との直接対話、費用対効果の厳密性、現状の課題の分かりやすさ、外縁を主体とした庭全体への配慮等に注視されている。これは、〔恒常維持管理の実施課程で、設問の不備と回答の実現性に対する困難に直面したことによりたいする対応であるとともに 受託候補者への一定の信頼によって、庭全体に目を向けてより具体的に恒常維持管理の内容の充実を検討できるようになったから、である。また、手入れの成果が出はじめたことによって、恒常維持管理の課題がより具体化し、所有者側でも審査にあたって設問の内容を理解しやすくなるよう工夫がなされている。

（3）3期 緊急修理をかねた恒常維持管理への展開

〔平成23年度以降（表3）、技術提案書を用いた審査は、＜調書＞を用いる書類選考と＜ヒアリング調書＞を用いる現地説明の2段階制となった。それにより現地説明へ参加する受託候補者は、書類選考によってあらかじめ数社に絞り込まれることになった⁽¹³⁾。併せて平成23年度には、「名勝無鄰庵庭園保存管理計画」⁽¹⁴⁾の一部が参考資料として添付された。それは、従来委託者として庭全体の恒常維持管理の方向性を提示できていなかったことの反省によるものであり、同計画における恒常維持管理の方針と直結する箇所を抜粋したものが表4である。平成23年度以降の技術提案書の設問は、平成19～20年度の恒常維持管理の実績を踏まえ、外縁部を4箇所に区分し、4年周期で外縁全体の植栽環境を整えることが前提されることになる。その方針は、平成14年度に記録された無鄰庵の保存管理の考え方と関連する。一年間に予算の範囲内で実施できる作業量を想定すると、園内の植栽量の大半を占める外縁の手入れは、複数年を費やす

表2 技術提案書 設問等（平成22-23年度）

平成22年度実施(2010-2011)	
第1号様式 方針	
項目	<p>設問1 ①表門及び玄関における地割の特徴と植栽構成を想定して人工数を記述して下さい。</p> <p>設問2 ②露地と③建物周辺及び中庭の関連性を踏まえ、地割と植栽に関する現状の問題点を、写真(1枚)を交えて記述して下さい。</p> <p>設問3 設問2に基づき、望ましいと考えられる実現可能な手入れの方向性を、無鄰庵庭園もしくはそれ以外の庭園での実施例をもとに、写真(1枚)を添えて提案して下さい。</p> <p>設問4 ②露地(茶室)について、設問3の提案と植栽構成を想定して人工数を記入して下さい。</p> <p>設問5 ③建物周辺及び中庭について、設問3の提案と植栽構成を想定して人工数を記入して下さい。</p> <p>設問6 ④流れと⑤園池の関連性を踏まえ、望ましいと考えられる実現可能な手入れの方向性を、無鄰庵庭園もしくはそれ以外の庭園での実施例をもとに、写真(1枚)を添えて提案して下さい。</p> <p>設問7 ④流れについて、設問3の提案と下記の植栽構成を想定して人工数を記入して下さい。</p> <p>設問8 ⑤園池について、設問3の提案と下記の植栽構成を想定して人工数を記入して下さい。</p> <p>設問9 ⑥外縁の特性を踏まえ、無鄰庵庭園もしくはそれ以外の庭園での実施例をもとに、写真(1枚)を添えて提案して下さい。</p> <p>設問10 ⑥外縁について設問9の提案と植栽構成を想定して人工数を記入して下さい。</p> <p>設問11 ⑦管理・作業スペース について地割の特徴と植栽構成を想定して人工数を記入して下さい。</p>
第2, 3号様式 年間工程表	
(前年19年度のものを流用)	
平成23年度実施(2011-2012)	
第1号様式 調書	
項目	<p>今後手入れにおいて配慮することが望ましい事項・各所で必要とされる人工数:①表門及び玄関, ②露地(茶室), ③建物周辺及び中庭, ④流れ, ⑤園池, ⑥外縁, ⑦管理・作業スペース</p>
第2, 3号様式 年間工程表	
(前年19年度のものを流用)	
第4号様式 ヒアリング調書	
項目	<p>設問1 無鄰庵庭園では、平成19～22年度にかけて地割の大部分「⑥外縁」を4箇所に区分し、＜別紙＞に記載された考え方に基づいて、継続的に植栽修理を行ってきました。平成22年度をもって、「⑥外縁」の植栽修理は一周したことになりますが、まだ十分な状態とは考えられません。そこで、これまでの経過と植栽修理の考え方に基づいて、平成23年度に実施することが望ましいと考えられる箇所とその理由について写真(1枚)を交えて記述して下さい。</p> <p>設問2 設問1に記述した「⑥外縁」のうち平成23年度に実施することが望ましいと考えられる箇所において、どのような植栽修理を実施するか、無鄰庵庭園以外の庭園での実施事例をもとに、具体的な考え方と内容について写真(1枚)を交えて記述して下さい。</p> <p>設問3 平成21年度から、地割の小分節「⑤池-gカエデ周辺」の低く抑えられた築山(コケ地)では、撒きゴケによるスギゴケへの転換が図られています。平成23年度に実施することが望ましいと考えられる箇所とその理由について写真(1枚)を交えて記述して下さい。</p> <p>設問4 現在の無鄰庵庭園にて、設問1～3以外で平成23年度に実施することが望ましいと考えられる箇所とその理由について写真(1枚)を交えて記述して下さい。但し、実行できる可能な事項に限ります。</p>

必要があることが明示されたことになる。]

恒常維持管理を受託した業者は、実際の作業を通じて、将来的な保存管理の傾向が予測しやすくなり、受託を継続するほど技術提案書の回答を作成する上で有利となる。制度上、競争性に欠けることは望ましくないため、設問の中に前年度までに実施した作業内容や今後の課題を記載し、委託候補業者間において競争が活性化するように配慮された。また書類選考での評価が僅差となってきたことから、平成24年度より、各月の作業を場所ごとに記載する従来の簡素な年間工程表から、作業項目・人工数・場所・対象となる植栽樹木とその手入れ時期が一度に把握することができる書式へと改められている（図2）。

＜ヒアリング調査＞の設問内容は、恒常維持管理に対する理解が一定の水準で満たされていることを前提とし、前年度の流れをみて実効性が高いとみられるスギゴケの取り扱いなど具体的な事項に言及されることになる。また当初、外縁の植栽樹木は4年周期で全体を繰り返し手入れする計画であったが、実際には、枝葉の濃度が薄くなった箇所の枝葉の伸張を一定期間待つ必要が生じた。それにより、外縁の植栽樹木の手入れは、庭全体の枝葉の伸張を見定めながら、局所的に植栽樹木の樹高や葉張りを抑制することが求められている。全体作業の中で人工数を割く割合が高かった外縁の作業が安定傾向に転じたことにより、枯損したもしくは衰退傾向にある植栽樹木や、園池護岸など地割のき損箇所などにたいする緊急修理⁽¹⁵⁾に関心が向けられるようになる。

平成24～25年度の技術提案書の設問は、恒常維持管理にたいする一定の理解が認められる受託候補者が選ばれたことにより、＜ヒアリング調査＞を通じて、より内実まで踏み込んだ内容となっている。外縁や苔の手入れにかんしては、計画と実際との間で齟齬が生じたことから、植栽樹木や地被植物の生理的な生育状況をふまえて、作業順序の誤差や手入れの濃淡が考慮されることになった。さらに、作業内容が緻密化し、恒常維持管理における一定の成果が上がることによって、委託者側に、植栽樹木の手入れだけではなく、地割のき損や補植の必要性を検討できる余地ができたことがうかがい知れる。

（4）まとめ

以上の6年間にわたる設問の変遷は、年度の進行につ

表3 技術提案書 設問等（平成24～25年度）

平成24年度実施(2012-13)	
第1号様式 調書 / 第2, 3号様式 年間工程表	
(平成23年度のものを流用) / (前年19年度のものを流用)	
第4号様式 ヒアリング調査	
項目	<p>設問1 名勝無鄰菴庭園では、平成19年度より段階的に⑥外縁の手入れをしてきました。その経過と、簡単な今後の指針を描写・記述したものが別紙に掲載した図表の緑色に塗られた箇所です。平成23年度は、平成19年度に実施した範囲の仁王門通りに越境箇所並びに滝石組み南側のシノキの手入れが行われました。以上の経緯に基づいて、平成24年度に実施することが望まれる範囲について、写真(1枚)を交えて提案して下さい。</p> <p>設問2 平成21年度から、地割の小分節「⑤園池ーgカエデ周辺」の低く抑えられた築山(コケ地)では、撒きゴケによるスギゴケへの転換が図られています。平成23年度までの間に、大分スギゴケが復元していましたが、まだ十分とはいえません。良好に復元する方法を写真(1枚)を交えて提案して下さい。</p> <p>設問3 設問2で提案された手法を用いて、平成24年度に実施可能なスギゴケ拡大作業範囲を下欄の図表に記載し、範囲設定の理由と手法の妥当性について写真(1枚)を交えて記述して下さい。</p> <p>設問4 名勝無鄰菴庭園維持管理委託業務が提案型になって、平成24年度で6年目を迎えます。平成22年度からは、恒常維持管理の範囲において緊急修理が行われています。平成22年度は、地割の小分節「⑤園池ーgカエデ周辺」におけるイロハモミジの補植と④「流れーa建物周辺」におけるヒノキの補植、平成23年度は「④流れーe芝地周辺」における一部の護岸修理と芝生の植え替えが行われました。以上の経緯を踏まえて、平成24年度に実施可能な恒常維持管理の範囲における緊急修理の内容を、写真(1枚)を交えて提案して下さい。なお、提案が無ければ記載は不要です。</p>
平成25年度実施(2013-14)	
第1号様式 調書	
(平成23年度のものを流用)	
第2号様式 年間工程表	
	1. 作業内容、作業期間(年月)、2. 作業人工数
第3号様式 実施及び緊急対応の体制	
(平成19年度と同じ)	
第4号様式 ヒアリング調査	
項目	<p>設問1 無鄰菴庭園では、平成19年度より段階的に⑥外縁の手入れをしてきました。平成25年度は7年目に当たり、スギなど一部の高木を除いてほぼ全ての樹木の枝葉の切り縮めを行うことができました。それにより、樹木一本ずつの枝ぶりが整理され、群植が際立つようになるとともに、通風通行が良好になるがされるようになりました。しかしその反面、植栽の濃度が薄くなったことにより、庭園内から外部の建物や標識、通行する自動車がよく見えるようになりました。今後数年をかけて植栽の濃度を濃くする必要がありますが、差し当たって平成25年度にどの辺りをどのように手入れすれば、次年度以降に植栽の濃度を濃くしていくことができるか、具体的に提案して下さい。</p> <p>設問2 無鄰菴庭園では、⑤園池ーgカエデ周辺の植栽帯(築山)全体に限って、苔をスギゴケに転換するという方針を取っております。しかし、現在はスギゴケへの転換がうまく進んでおりません。植栽帯のコケをスギゴケへ転換するためには、能動的な手入れが不可欠ですが、どのようにすれば確実に転換できるか御提案下さい。なお、苔の自生に任せる、または苔の自生する範囲を住み分けするといった提案は、設問の意図とは異なりますのでご注意下さい。</p> <p>設問3 これまでの提案型の維持管理業務の成果により、庭園全体の風趣が改善されたことにより、地割の毀損が目立つようになりました。つきましては、維持管理業務内において実施可能な緊急修理をご提案下さい。なお平成25年度には、④流れーf流れの南西側の橋周りと護岸の単費による修理を実施しました。</p>

参考：①表門及び玄関 ②露地 ③建物周辺及び中庭 ④流れ ⑤池 ⑥外縁 ⑦管理・作業スペース

図2 年間工程表(平成24年度～)

れて委託者の関心が変化していることを示している。その関心は、つねに費用対効果の高さに向きつつ、①受託候補業者の誠実かつ細やかな対応の確認、②現地での受託候補者との直接対話、費用対効果の実効性の確認、恒常維持管理の課題の分かりやすさ、外縁を中心とした庭全体への配慮等、③緊急修理を見据えた恒常維持管理への発展などに移行してきた。このように変化の振幅が大きいのは、本件が新規の取り組みであったこと、年度ごとに設問の内容が更新されたことが要因とみられる。

平成23年度以降の設問によれば、委託者と受託者は、前者の要求を後者がそのまま受け入れるという一方的な関係ではなく、作業の継続過程でお互いが触発される関係であることがわかる。とくに平成20年度と同25年度の設問のうち、外縁の植栽樹木や苔、緊急修理にかんする内容を比較すると、設問に対する受託候補者の作業結果が

如実に反映されており、委託者側の関心が、当初の費用対効果や作業内容から、庭そのものへの気づかいに移行していることが読みとれる。また受託候補者の主目的は、恒常維持管理業務の受託であるため、独自の提案が抑制されて説明にたいし無難な対応になりつつも、委託者にとって魅力がある技術提案に努められている。恒常維持管理の内容は、委託者側の考え方だけが反映されているわけではなく、相互の意図のいわば中間で成立しているのであって、さらには環境面や歴史背景をまじえた現前の庭への気づかいが考慮されている。

恒常維持管理の作業を実行する受託者は、実践の過程で庭へはたらきかけ

けを行い、それに呼応して変化した庭に触発されて、さらに庭へはたらきかけを行う。恒常維持管理とは、そのようなやり取りの連鎖そのものであり、繰り返される庭との交感のなかで生じる変化が、受託者と委託者にとっての将来への気づきとなる。このように、庭と真っ向から立ちむかう受託者の直接経験と委託者の間接経験とが、一定の期間をへて一つの集団的意味として共有されることで、恒常維持管理の方向性が具体化している。

4 委託者と受託者の志向とその充実の関係性

これまで、恒常維持管理に伴う受託者を選定する取り組みについて言及してきた。それは、記録を通じた委託者と複数の受託候補者との相互関係への言及であったが、委託者の見方に偏向しており、委託者と受託者の実践上の立場については触れられていなかった。ここでいう立

場とは、漠然とした思念などではなく、恒常維持管理の実現に向かうあるがままの心や意識（志向）と希求の達成（充実）の現れのことである。本節では、委託者側（筆

頭著者）と受託者側（連名著者）の双方の立場から、それぞれの志向と充実の関係について概説する。

（１）委託者

地方公共団体である委託者側は、公共性にもとづいて恒常維持管理を実施する必要がある。無鄰庵は、国の名勝に指定されており、一般に公開されている。名勝としての景観を保存しつつ、多岐にわたる来訪者が納得できるような恒常維持管理の実現が目指されている。恒常維持管理の費用は、美術館や動物園といった同市が所管する複数の文化施設の一つとして配分されている。かぎられた文化事業の予算内では、隅々にまでいきわたる恒常維持管理の作業を一年間で行うことは困難な状態であるが、極力来訪者の希求の充足に努められなければならない。

一方、山県有朋の遺産を継承したという点では、庭作りにたずさわった久原庄三郎と七代目小川治兵衛との関係を含めて、歴史的背景にたいする配慮が必要となる。具体的には、恒常維持管理をとおして無鄰庵の歴史がどのように継続されているか、たとえそれに具体性がなくても、来訪者への説明責任がある。最後に、同庭園が公共施設であり、入場料が課されているとはいえ税金が投入されている以上、恒常維持管理の委託業務にかかる業者選定には、公平性が保たれている必要がある。

委託者の恒常維持管理の意識は、無鄰庵が公共施設であるという特殊な事例であることを踏まえても、総じて来訪者の納得感や充足感に向いている。委託者にとって恒常維持管理の動機は、文化財庭園としての適切な保護であると同時に、サービスとして来訪者の納得感や充足感に貢献するということにほかならない。これを一般性に置き換えれば、委託者側の志向の根底には庭園を訪れた来訪者へ納得感や充足感をもたらすことがあり、その達成が委託者側にとっての充実となる。

（２）受託者

連名著者が恒常維持管理を受託した年度における立場は、以下のとおりである。

提案形式による業者選定制度では、毎年入札が行われることから、受託候補者の第一目標は、当然のことながら恒常維持管理業務の受託となる。受託候補者にとって技術提案は、委託者より提示された設問や資料に対して、翌年度に行う作業を提示するものであるため、中長期を見越した提案は効果的とは捉えず、その年度内に執行可能な作業の提

表４ 名勝無鄰庵庭園保存管理計画（抜粋）

恒常維持管理の中で進める修復剪定等
無鄰庵庭園では、通常の恒常維持管理による選定では補えない、より大きな植栽環境の修復を行うために、平成 19 年度から、年度毎に地区を区切って、恒常維持管理の中で、少しずつ修復剪定等を実施している。現在までの実施状況を踏まえ、今後の方針及び方法、行程について提案を行う。
1) 平成 19 年度から平成 21 年度までの実施状況
【平成 19 年度以前の問題点】
平成 19 年度以前の状況は、外縁部の樹木が繁茂し、上部に枝葉が集中し、林床に光が入らないことで、中程から下部にかけて枝が生育せず、庭園内部から見ると塀や周辺の建物が見通せる部分などがあり、目隠しのために、外縁部より内側のエリアに植栽された低木を大きく管理するような状況となっていた。
【実施概要】
・外縁部を 4 つの地区に区分し、林床に光を入れ、中枝の生育を促すために、毎年 1 つの修復剪定を実施している。現在 3 つ目の地区の修復剪定を行っている。
・平成 19、20 年度以前に、修復剪定を行った地区では、中枝の生育が見られてきた。一方で、実生樹木の生育の活発化も見られる。
【評価】
・年度ごとに手入れの状況を調整するために、4 つの地区の修復剪定が完了した後に、全体の調整を行う必要がある。
・樹木の下枝が生育してきたことにより、ある程度塀を遮断することができるようになったため、それまで塀を遮断するために芝地側の低木を大きく管理する必要性がなくなった。
2) 方針
平成 19 年度以前の状況は、外縁部の樹木が繁茂し、上部に枝葉が集中し、林床に光が入らないことで、中程から下部にかけて枝が生育せず、庭園内部から見ると周辺の建物・構造物・車両・塀などが見通せる状況となっていた。
外縁部の修復剪定の方針は、東山への眺望及び連続性を確保しながら、周辺に建物や構造物など景観に支障がある部分に関しては、段階的に外縁樹木の中枝の生育を促し、その枝葉により遮蔽されるような庭園景観に修復する方針とする。また、外縁樹木の枝葉が複層的に重なり合い、庭園に奥行き感ある景観を生み出すことを目指す。
3) 方針
【植栽構造の修復方法】
外縁部の修復剪定の方法は、まず、繁茂している樹木の枝抜きを行い、林床に光を取り入れ、中枝の生育を促す。次に、中枝が一定程度生育してきた段階で、均等に射光させ、樹形を安定化させるように、中枝の枝葉の整理を行う。その後、目隠しとして大きく管理していた低木などの樹木の切り下げを行う。その後も、樹木の透かし剪定を定期的に行い、林床に光を取り入れ、枝葉が適正に生育するような環境を維持する必要がある。また、林床に光が入ることにより実生木の生育も活発化するため、実生木の整理も定期的に行う必要がある。

案を優先することになる。むしろ継続して恒常維持管理を受託し続けるか、年度末に綿密な引継ぎをすれば、提案内容の持続は可能であるが、以後の受託者の考え次第では、過去の提案内容は解消されることになる。また、設問が毎年変化することは、目の前の問いへの回答が優先されるということであるため、注目度の低い継続的におこなう必要がある作業には関心が向けられにくい傾向がある。

この制度では、委託候補業者が思い思いの様々な提案をすることになる。提案内容は、業務の受託が決定した後初めて具体化し、委託者側と協議するなかでしだいに確定していく。たとえば茶室と洋館の間の目隠しのヒノキの補植、茶室東側のスギ林の剪定、流れの護岸を覆うコケの除去などの提案内容は、過去に実施した作業をつうじて導き出されてきた着想によるものである。

当初、委託者の恒常維持管理にかんする考え方が記述された「保存管理計画」の方針に沿って、植栽樹木の枝葉の切り縮めを重視していた。しかし、実践の過程で庭の様相は変化し、その都度、庭にたいする理解も深まるため、「保存管理計画」の方針が妥当とはいえない事態が発生することがある。植栽樹木の剪定にあたっては、一貫性に欠いた思いつきの提案にならないよう配慮している。たとえば、園内から東山への眺望は、単に外周の植栽樹木を伐り広げればよいのではなく、それら植栽樹木の頂上線と東山の稜線との位置関係、樹種ごとの樹形（アラカシとシイの区別）や、樹木同士の絡み（住み分け・被圧）など、実情を踏まえて手入れにたいする考え方を再確認する必要がある。この再確認の過程を踏まなければ、恒常維持管理の作業は、一貫性がなくなり迷走しかねない。現状では、〔継続して受託することで〕ある程度の技術提案が実現し、恒常維持管理のあり方が具現化してきた。それにより当初は認識できていなかったより細やかな事項に関心が移行している。より望ましい恒常維持管理の実施のためには、柔軟かつ細やかな方針の提示と中長期的目標の設定が望まれる。

以上のように、受託者としては、継続的に業務を受託し、技術提案はもちろん継続的に行う必要がある作業を実情に応じて達成できることが充実といえる。

（３）恒常維持管理の実践を目的とした共同体

委託者と受託者の立場の記述をおこなった結果、当初

の考え方をあらためる必要性が生じた。委託者と受託者は、それぞれ個別の立場において恒常維持管理の作業にあたっているが、恒常維持管理という同じ行為を遂行している以上は、一貫性が求められる。委託者と受託者は別々の組織にあり、それぞれの立場や個々の考え方は相違するのが当然であるが、恒常維持管理の実践にあたっては、— 現状の無鄰庵庭園にかんしては期間限定の — 共同体となることが不可欠である。もし、委託者と受託者においてそれぞれの志向があり、その結合が恒常維持管理の具体的な方針になるのだとすれば、同床異夢という状況が起こりえる。双方の立場ごとに実益は異なっても、来訪者へ納得感や充足感をもたらすという志向を共有しなければ、恒常維持管理は、委託者と受託者どちらかの私見や思い込み、または責任の押し付け合いに陥る。そこで、実践に先立って双方の立場のすり合わせを行い、実践過程で志向性に一貫性をあたえる行いとして＜合議＞が必要となるのである。

恒常維持管理のあり方を複雑にしているのは、— 無鄰庵の場合は学識経験者をふくめた不特定多数の — 第三者すなわち庭園を訪れた来訪者の目を想定する必要があることにほかならない。かつて山県有朋が無鄰庵に黒田天外を招いて案内をしたように、庭では、特定の所有者が来訪者を招き入れることが一般的である。それは、個人、企業、公共団体といった所有形態にかかわらず、庭が持続する上での最前提事項である。この第三者の存在こそが、恒常維持管理の志向の原点であって、委託者は来訪者の関心の置き所と自己の経済事情に注意を払い、受託者は来訪者が納得し満足できる恒常維持管理の実現に努めている。

（４）まとめ

従来の研究態度によると、恒常維持管理は植栽樹木の管理作業とみられてきたが、それは実態を矮小化した認識にすぎない。そもそも委託者と受託者という体制の構図でさえ、恒常維持管理の前提の一部でしかなかった。行為としての恒常維持管理とは、現前の庭を訪れる来訪者を念頭においた委託者と受託者の継続的な行動のことである。

５ 庭の恒常維持管理における一般性の顕在化

（１）相互触発

恒常維持管理が複雑で豊かな構造をもつことは、個別事例の記録を通してだけでも、確証を得ることができる。恒常維持管理の体制は、個々の人のつながりとその複数の集まりによる厚みをもった網状構造をもち、本論の筆頭著者と連名著者というならば、かれらはその構造の一部に位置づけられる。来訪者と委託者、受託者の協同は、あらゆる庭で通用するといった性質のものではなく、個別の庭でのみ成立する。別の言い方をすると、個別の庭は、日常的にはそれぞれ別社会に生きる不特定多数の来訪者ならびに委託者（所有者）、受託者（庭師集団）を結びつけ、恒常維持管理を動機づける媒体となっている。

行為全体としてみれば、来訪者をふくむ網状構造が恒常維持管理の基盤となっているが、具体的なその作業は委託者と受託者が担っている。恒常維持管理の作業は、客観的にみると委託者が受託者へ指示した事項が実行されるという一方通行の関係のように思える。無鄰庵においても、あらかじめ委託者が用意した「保存管理計画書」と技術提案書の設問を通じて、受託候補者を審査した結果、受託者を選定するように、委託者は能動的で受託者が受動的という構図があるように見える。たしかに委託者が受託者に業務を与えているという条件だけに注視すれば、双方の能動・受動の関係は固定している。しかし、一定の秩序にしたがって日々移り変わる自然的側面⁽¹⁶⁾と人間の社会・文化的側面の両義性を併せもつ庭では、そのように単純な対人関係は成立しえない。

委託者と受託者は、風土、天候、植物の生理などといった自然的側面と、対人関係や地域性、歴史といった社会・文化的側面の双方に配慮することが求められている。どちらかといえば、委託者は社会・文化的側面、受託者は自然的側面への配慮がつよい傾向がある。委託者と受託者は、自然的側面と社会・文化的側面の両立をめぐる志向性を共有する。ところが、この二つの側面の秩序は、それぞれ異なる次元の上にあることから、その両立にはあらゆる工夫と不断的努力をするほかない。社会・文化的側面は、自然的側面の先験性を土台としているため根源は共通しているが、前者には人間の思惑がつうじる余地があっても後者にはないという決定的な違いがある。つまり恒常維持管理とは、委託者と受託者のどちらにとっても恣意的に対処できない行為であるため、自然的側面と社会・文化的側面の両立には、どうしても協同

の必要性が生じる。技術提案書の設問と関係資料は、そうした協同作業の過程を示しているといえよう。

けっきょく委託者と受託者が何をしていたかといえば、それは日々変化する庭への対応である。委託者は、受託者に社会・文化的側面における要求をつたえ、それにもとづいて受託者は作業を開始する。受託者は、作業の過程で自然的側面による不都合に直面すると、委託者に要求の修正もしくは調整を協議する必要性が生じる。

たとえば委託者側は、過去の経緯により無鄰庵の<⑤-g（池／カエデ周辺）>の築山上にスギゴケを生育させることを望んでいたが、現状の生育環境ではその他のコケ類が優勢であるため、受託者側は自然的側面に即して苔の住み分けが望ましいとした。かぎられた予算内では、苔の全面的張り替えが困難であったため、撒き苔や部分的な補植といった対処になったが、それだけでは、どうしても環境に適した種類の苔の繁茂が競り勝ってしまう。こうした現象に自然的側面と社会・文化的側面からの要請との不整合が露見している。

そこで受託者は、日当たりのよくない<⑤-g（池／カエデ周辺）>において活着しやすいオオスギゴケを予算

写真1 ⑤-g（池／カエデ周辺）

の範囲で継続的に補植するという提案に至った。しかしこのオオスギゴケはほとんど市場に流通していないため、庭園内の来園者から見えない場所に生育するオオスギゴケを目立つ場所に移植するという方策がとられた。オオスギゴケを剥いだ場所は、もともとその種が優先していたため、自然とオオスギゴケは再生することになる。つまりは、庭園内においてオオスギゴケの現地生産が試みられることになったわけである。

こうした自然的側面と社会・文化的側面の両立の根底にあるのは、＜時間の推移＞であり、委託者と受託者は時の経過において相互に触発されながら、恒常維持管理という行為を具体化している。

受託者は、委託者に触発（要求）されて、植栽樹木を剪定、挿植するなどといった影響を庭に与え、庭内における移り変わりを見守る。ある程度の時間が経過することで、はじめて委託者の社会・文化的側面における要求の実現性が判別できるようになる。委託者の要請が実現した場合は、受託者が自然的側面と社会・文化的側面の折り合いをつけることに成功したということであり、その逆の場合は、委託者の要求が空想的であったことになる。恒常維持管理の将来の課題は、受託者が庭に触発（関与）した後、時間の経過を経て、庭から受託者が触発（誘発）されることによって具現し、委託者がその課題の報告を受けるというかたちで受託者に触発（誘導）されることにより、はじめて将来の対策を検討できるようになる。このように恒常維持管理という行為は、庭を通じた時間の推移の中で、受託者と委託者が相互に触発されることにより、具体化している。

（2）間主観性

恒常維持管理の一般性のひとつとして認められる相互触発は、来訪者との間ではかならずしも成立しえないという点で、恒常維持管理を包括する一般性としては不十分である。後者を明らかにするためには、相互触発を導入の糸口として、さらに恒常維持管理の実状における来訪者・委託者・受託者の諸関係を掘り下げる必要がある。

たとえば前項で述べた苔の生育の事例では、委託者がスギゴケに着目した動機の説明が欠落していた。ある年度の受託者によると、かつて無鄰庵の恒常維持管理がその業者に限定して委託されていた頃は、＜⑤－g（池／カエデ周辺）＞の築山全体にスギゴケが被覆していたと

いう。また委託者側の筆頭著者は、無鄰庵と同地域で同時期に築造された名勝對龍山莊庭園（京都市左京区）の築山がスギゴケで覆われていたことを把握していた。実際に＜5－g＞の築山を詳しく観察すると、まばらにスギゴケの生育が確認できた。以上の総合的な見解より動機づけられたのが、植生復元的なスギゴケの育成であった。しかしその時点では、環境に適したホソバオキナゴケやスナゴケが優勢で、築山上はそれらによる明るい黄緑色の苔の光景となっていた。数十年来、無鄰庵ではスギゴケの育成に取り組まれてこなかったため、来訪者にとっては、後者の光景が見慣れたものであった。よってスギゴケの育成は、委託者と受託者にとって合意に基づいていた作業であるが、無鄰庵に何度も来訪している来訪者にとってはなれ親しんだ光景の変貌でしかない。

このような出来事をとおして、恒常維持管理における二者以上の主観のはたらきが明らかになる。委託者は近似した文化財庭園を模範として、受託者は旧来の状態に近づけることを意図して、苔の生育状況の復元を望んでいる。それにたいして、来訪者にとって光景の変化は、違和感にうつる可能性がある。複数の主観には、前もって正解があるわけではなく、多数決や最大公約数といった判断が通用するはずもない。なぜなら先述の苔の育成にみられるように、恒常維持管理は経済事情、歴史背景に条件づけられたうえで導きだされた行為であり、さらにその出来事の大半が自然的側面に支持されている。複数の主観とは、個々人の私見や欲求を意味しているのではなく、あらかじめ条件付けられた恒常維持管理にかんする漠然とした志向の断片である。恒常維持管理にかんする全ての主観にはなんらかの妥当性があるため、それらの優劣は、前もって判断できるのではなく、社会・文化的側面の条件内で、最終的にそうならざるを得ないという結果に導かれていかれることになる。

この「複数主観」は、恒常維持管理の志向が共有されているという点であやまった表記であり、むしろ「間主観」と言い換え、ひとまとまりの厚みをもった網状構造として把握しなければならない。間主観は、社会・文化的側面と自然的側面を背景とした行為の漠然とした可能性である。復元的な苔の植生復元や、外周の植栽を遮蔽的あるいは開放的にすることなどといった行為の可能性は、前提条件によって限界づけられており、それが

結果的に恒常維持管理の一貫性となり創造性⁽¹⁷⁾の余地となっている。

結語

恒常維持管理とは、常識的にいうと毎年受託者が委託者の依頼に応じて植栽樹木の管理を行うことである。ながらく学術研究もそのような認識の延長線上にあったが、今やそれについて掘り下げる余地が相当あることが明らかとなった。

恒常維持管理は、自然的側面に支持された社会・文化的側面の条件のもと、来訪者の迎接などを念頭に置きつつ、委託者と受託者のやり取りの中で具現化される行為である。無鄰庵という個別の庭の実務記録から出発した本論の冒頭では、そのうち委託者と受託者のやり取りだけを前提していたことになる。

恒常維持管理は、植物の生理や生長といった自然的側面と社会・文化的側面におけるそれぞれの秩序が絡み合いながら成り立っており、換言するとそれは、庭の恒常維持管理を志向する間主観の網状構造にもとづいて、毎年繰り返される交渉や作業といった持続しつづける運動なのである。いわば共同体ともいえるこの網状構造とは、数多くの前提条件と行為の可能性が介在した主観と主観の間そのもの、いわば個別の庭において同じ志向をもった来訪者・委託者・受託者の交流関係であり、その時々によって編み目が伸びたり縮んだりする魚網のような自由度をもっている。社会的枠組みや経済事情が激変しようと、しなやかに時代の流れに沿って継承され続けている庭があるのは、その網状構造の柔軟性と各時代における限定的な創造性が作用しているからにほかならない。

<間主観性>とは、恒常維持管理の一般性の土台であり、その上部で<相互触発>が繰り返されている。この二つのキーワードの関係性が恒常維持管理の一般性の枠組みを言い表している。恒常維持管理の内容自体は、個別の出来事からなっているが一所有者みずから自邸の庭の手入れを行っていても、他者とのかわりが欠かせない点において—あらゆる庭の恒常維持管理が間主観性にもとづき相互触発をとまなうことは、普遍的で一般性をもっている。つまり科学としての恒常維持管理の記述は、それぞれの庭における網状構造の内実とその繰り返す

時間の動向（運動）から導きだされる必要があり、その結果として再現可能な科学性が獲得されるのである。

しかし本論の記述だけでは、やはり恒常維持管理の一般性に迫ったことにはならず、さらにこれから数多くの事例を検証して、論の真実性を分析していく必要がある。これまで述べてきたように恒常維持管理が間主観性にもとづいた相互触発によって導きだされているのであれば、俯瞰的な客観を肯定して、個別の主観や経験を批判するには矛盾が生じる。なぜなら恒常維持管理が委託者と受託者、受託者と庭における相互触発の結果であるとすれば、従来の研究態度で関心の中心であった庭の外観をいかに分析しようと、従事者の交流関係に言及しないかぎり、その一般性を導きだすことは不可能だからである。恒常維持管理を単純なもの、感覚的なものとする見方は、実情への関与を避けているか、最初からそれを単純で感覚的と決めつけているかのどちらかなのである。

庭を舞台とする人々の個別経験や複数の主観は、恒常維持管理の根源であって、それを考慮しない俯瞰的かつ客観的な見方や記述には、そもそも根拠というものが欠落している。俯瞰的かつ客観的な記述は、その内容がたとえ実際の出来事に依拠していたとしても、恒常維持管理の網状構造を把握していない以上は、外観やその周縁から引き出される数少ない情報によって追体験が不可能な客観的世界を構築し、それを個々人によって偶像化しているにすぎない。従来の恒常維持管理の記述は、科学者ごとに構築した客観的世界のなかで完結されてきたため、実践上はおろか論理上も再現、伝承ができなかったのである。これまで行政が指定・登録する文化財庭園について恒常維持管理の報告書が公刊されていないこともおなじ理由によるものである。とはいえ、従来の恒常維持管理の研究のすべてに再現性がなかったわけではない。ただ、庭の外観を俯瞰して行われる客観的世界の構築作業を放棄し、眼前にある庭における網状構造の実態とその繰り返す時間の動向をつづさに記述することが求められるだけである。そのような記述が継続して蓄積されてゆけば、おのずと恒常維持管理の一般性の信憑性は高まるはずである。

謝辞

本稿は、名勝無鄰庵庭園の保存管理に関係する全ての
方々の協力なしには成立し得ませんでした。この場を借
りて御礼申し上げます。

補注、引用・参考文献

- (1) 京都芸術短期大学ほか 日本庭園研究センター:1997
- (2) 京都造形芸術大学 日本庭園研究センター:2003
- (3) ランドスケープ研究 VOL. 64 NO. 5, pp. 423-426
- (4) ランドスケープ研究 VOL. 65 NO. 5, pp. 447-450
- (5) 中島宏:小石川後樂園の植栽管理に関する考察:日本
庭園学会誌 17:2007, 13-38
- 中島宏:小石川後樂園と浜離宮恩賜庭園の植栽管理のあ
り方に関する研究:千葉大学博士申請論文:2008
- 中島宏:浜離宮恩賜庭園の植栽管理に関する考察:日本
庭園学会誌 19:2008, 1-25
- (6) 無鄰庵は、かつて同一の業者との間で随意契約されて
いたが、指名競争入札に移行し、委託業者が毎年変更す
る期間が続いた。平成 19 年度より技術提案を通じた業者
選定制度を導入、翌年度から技術提案書を指名業者に提
示し、各業者からの設問の回答が審査に用いられること
になった。なお業者選定は、恒常維持管理の実施の前年
度に行われるため、技術提案書の設問は平成 20 年度から
同 25 年度に作成されたものである。審査は補職者が行い、
設問の作成を担当した本稿の筆頭著者は審査に直接関与
していない。
- (7) 同図は、「名勝無鄰庵庭園保存管理計画」(京都市文
化市民局、未公刊)の策定に際して作成されたものであ
る。
- (8) 尼崎博正編:植治の庭 - 小川治兵衛の世界:淡交社:
1990, pp. 53-61
- (9) 黒田譲(天外):続江湖快心録:山田芸草堂:1907
- (10) 小川治兵衛の直系とは限らない。
- (11) 京都造形芸術大学 日本庭園研究センター:2003:
pp. 112-117
- (12) 平成 19 年度の技術提案では、比較的自由な書式が採
用されたが、翌年より技術提案書により書式が統一され
たということ。
- (13) 平成 19~23 年度までの審査の積み重ねにより、書類
選考にかかる上位の受託候補業者が数社に固定されてき

たことによる措置。

- (14) 京都市文化市民局:名勝無鄰庵庭園保存管理計
画:2011
- (15) 阪上富男ほか:名勝無鄰庵庭園の緊急修理の履歴か
らみた保存管理の継続性:平成 25 年度日本庭園学会関西
大会シンポジウム・研究発表資料集:2013, pp. 58-63
- (16) ここでいう自然的側面については、従来、取り立て
て言及されてこなかったが、ウィーベ・カウテルトは、
それを自然の不思議な働き」と形容している。(日本庭園
研究センター:1997, pp. 14)
- (17) 日本庭園研究センター:1997, pp. 1